

## 第 13 回 発 表 集 会 印 象 記

高岡市保健センター 熊谷 武夫

第13回富山県農村医学研究および健康管理活動発表集会は去る2月3日13時30分から、厚生連高岡病院地域医療研修室（I）を会場として開催されました。

今回は何年ぶりという積雪をみた、足場の悪い日の集会でしたが、会場には約70人の参会者がつめかけて盛会でした。

会長の越山先生の挨拶にもあった通り、医師・看護婦はもとより、農協青年部・ヘルパーの方々も参加されていました。

先ず高岡病院第二内科の亀谷富夫先生が座長をされて最初のセッションの口演が始まりましたが、このセッションの4題はいずれも検診がテーマでした。

13時36分から第1席の厚生連滑川検診センター・大原さんの「滑川検診センターにおける骨密度検診の検討」が口演されました。

腰椎の正面骨密度量の測定を1,343名の女性で実施して、生活習慣、生理との関連などについて言及されました。

続いて日本健康倶楽部北陸支部の黒牧さんが「富山県内における骨粗鬆症予防検診とその関連要因の検討」を報告しました。

こちらは3,320人の女性の橈骨遠位1/3部位を測定したものでした。

座長の運動との関連は如何かという質問に対して、滑川の岸さんは「綱引きをしている婦人が高い値を示した」といわれ、座長は「テニスやバレーボールの選手が骨密度が高い」と話されましたが、測定の部位によって

も多少の違いがあるかも知れないということでした。

骨密度の検診は既に市町村の「婦人の健康診査」の項目にも取り入れられていますが、肝心のデータの蓄積が不十分で、検査機器にも検査部位にもまだ問題があることから、亀谷先生は「重要な課題であるから今後検討を重ねて欲しい」とコメントされました。

第3席は「腹部超音波検診の成績と問題点」を滑川病院の小川院長先生が発表なさいました。

昭和63年から平成7年の間に38,056名に超音波による腹部腫瘍のスクリーニングを実施して、6名の癌患者が発見されたそうですが、演者は労力の割には効率が悪いと結論されました。

第4席は「二次検診未受診者の実行要因」を高岡検診センターの作道さんが報告されました。

平成7年の夏に高岡検診センターの「日帰りドック」を受診した1,074人にアンケートを実施し、二次検診の受診の有無でグループ分けをして検討を加えたところ、未受診のグループでは「自分の健康を犠牲にしても仕事を続ける」傾向が強いことが判明したとのことでした。

小川先生は「要精検者の判定にも問題があり、受診者の検診結果に対する恐怖感を取り除く必要がある」と話され、座長は「二次検診の必要性についての健康教育が大切である」

と結ばれました。

14時43分からは熊谷が座長を勤め、環境保護に関わる演題が発表されました。

第5席は高岡市農協青年部の吉野さんによる「ゆたかな水・緑を次代へ」と題しての15分の発表でした。

市農協の青年部の会員が実施された、市内の30カ所の自噴井での水量を調査、水質の汚染対策としての農業用水への魚の放流、屋敷林の杉の木や柿の木の実態調査と地域での植樹などの活動報告をされました。

また酸性雨の調査として里芋の葉の観察を実施された結果では、空気中の二酸化窒素の量が里芋の葉の変色の状況と平行していると報告されました。

富山医薬大の寺西先生は「このような調査で、総括的な環境の評価が可能である」と話され、越山先生は「21世紀を担う若者の活動に対する期待が大きい」といわれました。

次いで第6席の日本健康倶楽部・中川先生は「くれはの森から」と題されて、富山市の呉羽丘陵の開発に関連して、自然の植生や動物の生態が変化しつつある状況を現場の写真を提示されながら説明され、行政の開発行為に対して、市民が自然環境保護の観点からもっと関心を持つべきであると強調なさいました。

元富山保健所長の中川先生は数年前からこのテーマで農医研誌に投稿されておられますので、関心のある方は平成5年の24巻以降の本誌をご覧ください。

(註: 24巻139頁, 25巻90頁, 26巻82頁を参照して下さい。)

第7席の荒田さんは第10回(平成5年)の報告に続いて「あいがも農法の現況」を口演されました。

演者は、従来から無農薬農法を実践しておられますが、合鴨は除草を目的として飼育しておられます。

まず水田にれんげ草を栽培することから始

めて、年間40トンの堆肥を作って肥料にしておられ、子供さんにも手伝わせて耕作されている模様をタイ国の実情もまじえて報告されました。

また、会場では「あいがも米」が参会者に試食用として配られました。

なお本誌24巻155頁には大浦栄次さんの「合鴨除草事始め」の報告があります。

5分間の休憩の後に、15時39分から高岡病院副院長の豊田務先生が座長をされて、越山先生の特別発言がありました。

「生存秩序を大地に学ぶ」と題されて先生は約20分にわたって、農業や農村医学の重要性を、自然保護、環境保護の観点から力説されました。

参考資料として配付された1月25日付け病院新聞の先生の寄稿文「老人医療のdoとbe」は、介護保険の導入が問題になっている、今日の要援護高齢者の処遇に関連して、たいへん示唆に富んだご意見であると思われました。

続いてアレルギーに関係のある演題が2題発表されました。

第8席は富山医科薬科大学病理学の新村さんの「ハチ毒抗原に対するIgE抗体価の測定」でしたが、林業労働者のハチの刺害の対策を考えるために、酵素抗体法でIgE抗体価を測定され、測定された4種類のハチの中では、キロスズメハチに対する抗体価が高い人が多かったと報告されました。

寺西先生は蜂による死亡者が年間20~40人を数えていることから、林業労働者の救急医療が問題であるとコメントされました。

富山医科薬科大学公衆衛生学の寺西先生の演題は「空中花粉の新しい観察法」で、蛍光色素を用いて花粉の核のDNAを染色して観察された結果、花粉核の蛍光染色は花粉の同定に有用であることが判明したと報告されました。

16時23分からのセッションは高岡病院第一

内科の狩野哲次先生が座長をされましたが、いずれも高齢者の介護、ターミナルケアに関連した演題でした。

第10席「農協におけるホームヘルパー養成の現状と課題」は農協中央会の寺崎さんが発表されましたが、現在受講中の一級課程の10人を含めてJAホームヘルパーは総数465名で、JAとなみ野の60名を筆頭に、10名をこえる養成を実施されたJAは15におよんでいるとのことでした。

JA高岡には27名のヘルパーが活躍していると伺って、高岡市のホームヘルプサービスに関わっている者としてたいへん心強く感じました。

越山先生の「老人介護は汚い、危険、きつい3Kであるが、農協のヘルパーの方々も行政に積極的に協力して欲しい」との討論がありました。

第11席の高岡病院看護部平野さんは「当院の高齢化社会に対する活動」と題して、高岡病院の訪問看護、JAホームヘルパー実習、病院ボランティア活動（JAホームヘルパーの方々の高岡病院でのボランティア活動）を報告されました。

訪問看護については、平成5年に高岡市医師会に「訪問看護ステーション」が設けられて、在宅療養中の患者さんが利用しておられますが、高岡病院では平成5年に訪問事業専用の車両を購入され、最近では月に100件の訪問看護を実施されており、特にターミナルの患者の在宅療養の希望を可能な限り受け入れたいというご報告に感銘しました。

病院の看護職員が、在宅介護・在宅看護に関して、ホームヘルパーの活動にご理解をいただいているというご発表は、高岡市の老健計画の遂行に種々の問題を抱えている保健センター所長としてもたいへん嬉しく思われました。

第12席は高岡病院看護部の山岸さんで「死にゆく患者の心理段階と看護婦の態度との関

連」を発表されました。

病棟勤務の看護婦さんにアンケートをして、ターミナル患者を看護している看護婦の持っている態度について分析されました。

演者は患者の心理状態の変化を捉えて、それに応じて、タイムリーなケースカンファレンスを実施して、患者の要求に応えたいと結ばれました。

座長は「癌告知の有無も患者の心理状態に影響するのではないか」と指摘されました。

最後の演題では、農医研の大浦さんが「看護職員の「老・病・死」に対する真情」と題して、高岡・滑川両病院の看護職員550名と看護学生70名について調査を実施された結果を報告されました。

現在の基準看護における付添いの廃止の問題では、自身には70%が家人の付添いを希望し、また87%が親族に付添いをしたいとしており、自身への癌の告知の希望は50%、安楽死の肯定は51%、ホスピスの必要性を認める人は87%だったそうです。

「老病死」に関しては、「癒し」等、数量化できない医療行為の意義を認める人が多数で、現実の医療の中で、「ただ手を握っていたい、握られていたい」といったターミナル患者の希望をどのように実現するかが次の世紀の医療の課題であると結論されました。

会員発表は17時29分に終了し、越山先生の「本集会には若い会員の発表が多くあって、しかもヘルパーさんや農協の関係者の発表もあり、来るべき21世紀を担う人材が育ちつつあると感じ、頼もしく思った」とのご挨拶で閉会しました。

本集会が今後ますます発展されますことをお祈りしまして稿を終わります。

第13回集会をお世話下さいました厚生連の大浦さんをはじめ事務局の方々の御苦勞に深謝します。

(平成8年2月22日記)